

2017年4月23日聖日礼拝説教

「心の割礼」

ローマの信徒への手紙2：17－28

菊地 順

今日の聖書箇所で、パウロはユダヤ人の欺瞞を暴いています。しかも、それは、ユダヤ人たちが誇りとした律法をめぐる欺瞞でした。パウロは23節で、「あなたは律法を誇りとしながら、律法を破って神を侮っている」と非難しています。律法は、ユダヤ人の誇りでありました。それは、モーセがシナイ山で神からいただいた十の戒めに基づく教えでありました。しかも、イスラエルの民は、その十の戒めに基づいて神と契約を結び、それを守ることによって神の祝福に与ると共に、神の民となったのです。それゆえ、律法は、イスラエルが神の民であることを保証するものであり、またそれゆえに、イスラエルの民はそれを大いに誇りとしたのです。そのため、律法を持たない他の民族を「異邦人」と呼んで蔑むようにもなりました。また、歴史的に見た場合、律法が一層重視されるようになったのは、バビロン捕囚から帰還してからでした。イスラエルの民は、バビロニアによって滅ぼされたのち、多くの指導者層が首都バビロンに捕囚されますが、その後ペルシャによって解放されます。そして、徐々にカナンの地に帰還し、民族の立て直しを図りますが、その時、その礎としたのが律法でありました。すなわち、囚われの地のバビロンから帰還したエズラは「律法」と総称される旧約聖書の最初の5つの書を新しい法典として発布し、その律法に基づいて民族の再建に着手したのです。そして、この頃からイスラエルの人たちはユダヤ人と呼ばれるようになりました。それは、紀元前5世紀頃のことでした。ですから、ユダヤ人の歴史において、律法は民族の生命線ともなっていたのです。

そうした歴史を背景として、パウロは、17節でこう語っています。「ところで、あなたはユダヤ人と名乗り、律法を頼り、神を誇りとし、その御心を知り、律法によって教えられて何をなすべきかをわきまえています。また、律法の中に、知識と真理が具体的に示されていると考え、盲人の案内者、闇の中にいる者の光、無知な者の導き手、未熟な者の教師であると自負しています」。パウロは、ユダヤ人は律法によって神の御心を知り、なすべきことをわきまえているため、「盲人の案内者、闇の中にいる者の光、無知な者の導き手、未熟な者の教師」と自負していると言うのです。「盲人」「闇の中にいる者」「無知な者」「未熟な者」とは、すべて異邦人を指しています。それに対し、ユダヤ人は、「案内

者」「光」「導き手」「教師」であると自負しているのです。そこには、並々ならぬユダヤ人の自意識が示されています。それは、むしろ思い上がりともいっただ方が適当かも知れません。律法を持つことによって、そうしたすさまじい自意識、絶対的自信を、ユダヤ人は抱いていたのです。

しかし、現実はどうであったのでしょうか。それは、真逆であったのです。パウロは、こう糾弾しています。「それならば、あなたは他人には教えながら、自分には教えないのですか。『盗むな』と説きながら、盗むのですか。『姦淫するな』と言いながら、姦淫を行うのですか。偶像を忌み嫌いながら、神殿を荒らすのですか」。ここで指摘されている3つのことは、すべて十の戒めに記されていることです。肝心要の教えです。しかし、それを守っていないと言うのです。異邦人にはその戒めを誇りとしながら、自分たちはそれを破っていると言うのです。そしてパウロは、それは何よりも神を侮ることだと言って糾弾したのです。

しかし、それは、その時始まったことではありませんでした。パウロは、イザヤ書 52 章 5 節の言葉を引用して、「あなたたちのせいで、神の名は異邦人の中で汚されている」と語るのです。繰り返し、繰り返し、ユダヤ人は、イスラエル人と呼ばれていたときから、律法をないがしろにし、神を侮り、異邦人の中で神の名を汚してきたと言うのです。それが、ユダヤ人たちの偽らざる現実であったのです。

パウロは、改めて、こうした現実を直視しなければならなかったのです。それは、同じユダヤ人として、深い嘆きを覚えずには語り得なかったことではないかと思います。しかし、その嘆きは、そこだけでは留まらなかったのです。というのも、もう一つ、ユダヤ人たちが誇りとしていたことにも、その嘆きは及ばざるを得なかったからです。それは、割礼です。ユダヤ人たちが、神の民としてのしるしとして、自分の体に施した割礼です。パウロは、こう嘆いています。「あなたが受けた割礼も、律法を守ればこそ意味があり、律法を破れば、それは割礼を受けていないのと同じです。」

ご存じのように、割礼は、神と契約を結び、神の民とされたとき、イスラエルのすべての男子が受けるべく命じられたものでした。そのことを記した創世記 17 章には、こう記されています。「あなたたちの男子はすべて、割礼を受ける。包皮の部分を切り取りなさい。これが、わたしとあなたたちとの間の契約のしるしとなる。いつの時代でも、あなたたちの男子はすべて、直系の子孫はもちろんのこと、家で生まれた奴隷も、外国人から買い取った奴隷でああなたの子孫でない者も皆、生まれてから八日目に割礼を受けなければならない。----それによって、わたしの契約はあなたの体に記されて永遠の契約となる」。アブラハムは、この命令が下されたとき、直ちにそれに従ったと聖書には記されてい

ます。

歴史的に見れば、この割礼という習慣は、元々は古代エジプトから始まり、それをイスラエルの民も受け入れていったようです。しかし、他の民族がこの習慣を止めて行く中、イスラエルの民は、特にバビロン捕囚時代、イスラエル人のアイデンティティを確保するために、これを堅持し、その後もそれを継承して行きました。しかも、それは民族の誇りとして継承されていったのです。そのことは、初期の教会において、主に異邦人伝道に従事したパウロと、ユダヤ人伝道に従事したペトロたちとの論争として、大いに議論されたことにも反映されています。今日は、そのことには触れませんが、いずれにしても割礼は、ユダヤ人たちが神と結んだ契約のしるしとして、大いに誇りとしたことであつたのです。しかし、それは、ここでパウロが語るように、神の民として、立派に律法を守っていればのことであつたのです。立派に守っていればこそ、それは大いに誇ることもできたでしょう。しかし、すでに見たように、現実はそうではなかつたのです。

そこでパウロは、深い嘆きの中で、次のように語らなければならなかつたのです。「だから、割礼を受けていない者が、律法の要求を実行すれば、割礼を受けていなくても、受けた者と見なされるのではないですか。そして、体に割礼を受けていなくても律法を守る者が、あなたを裁くでしょう。あなたは律法の文字を所有し、割礼を受けていながら、律法を破っているのですから」。それは、当然の議論ではないでしょうか。そして、パウロは、最後にこう語るのです。「外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、肉に施された外見上の割礼が割礼ではありません。内面がユダヤ人である者こそユダヤ人であり、文字ではなく“霊”によって心に施された割礼こそ割礼なのです。その誉れは人からではなく、神から来るのです」。パウロは、「外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、肉に施された外見上の割礼が割礼ではない」と語るのです。そして、「内面がユダヤ人である者こそユダヤ人であり、文字ではなく“霊”によって心に施された割礼こそ割礼なのです」と語るのです。大切なのは、肉に施された割礼ではないのです。霊によって心に施された割礼こそ、本当の割礼なのです。パウロは、このことを、他の書簡の中でも、同様に語っています。コリントの信徒への手紙の中では、「割礼の有無は問題ではなく、大切なのは神の掟を守ることです」と語り、ガラテヤの信徒への手紙の中では、同じように「割礼の有無は問題ではなく」、「愛の実践を伴う信仰こそ大切です」と語り、また「大切なのは、新しく創造されることです」とも語っています。

ところで、話は少し変わりますが、なぜユダヤ人たちは、それほど誇りとしていた割礼をないがしろにするようになったのでしょうか。むしろ、そこが、今日の聖書箇所での最も大事な点ではないかと思ひます。今日の聖書箇所では、パ

ウロは、ユダヤ人たちをこう呼んでいます。「あなたたちはユダヤ人と名乗り、律法に頼り、神を誇り」としている。それは、すでに見たように、自分たちを神の民と自認し、神に選ばれた民であるとの選民思想を持つ、誇り高きユダヤ人の姿を語っている言葉であります。そして、何よりも神の戒めである律法を持っているということが、ユダヤ人の絶大な誇りであったのです。そのため、律法を持たない他の民を「異邦人」と呼び、蔑みさえしたのです。しかし、実は、その絶大な誇りこそ、ユダヤ人の精神を蝕んでいく毒素ともなっていたのです。ここでパウロは、ユダヤ人たちは律法に頼っていると語りますが、これは、もう少し正確に訳しますと、律法に「安んじている」という言葉なのです。ただ律法を頼りとしているというのではなく、律法に安んじているというのです。頼るのであれば、それは決して悪いことではありません。しかし、そうではなく、安んじていると言うのです。安住していると言うのです。自分たちには神の律法があると言って、その上に胡坐をかき、それでもって満足し、本気で律法の実現には取り組んでいないと言うのです。この「安んじる」「安住する」ということが問題なのです。

ギリシャ語では  $\epsilon\pi\alpha\nu\alpha\pi\alpha\nu\omega$  (エパナ-パウオー) と言います。〈エパナ〉とは「上に」という意味で、〈パウオー〉は「留まる」という意味です。すなわち、あるものの上に留まる、依拠する、信頼するという意味ですが、ここでは「安んじる」という語がふさわしい訳語であると言えます。ユダヤ人たちは、律法の上に安んじていたのです。その上に胡坐をかいていたのです。そして、本気では律法を求めてはいなかったのです。律法を持っていることを誇り、それに満足し、それ以上真剣に律法に生きようとはしていなかったのです。そのくせ、律法を持たない人たちをどこかで蔑み、せせら笑いすらしていたのです。そのため、口先では律法について自慢げに語っても、実際の生活ではしばしば自らそれを裏切り、神を侮るような生活に陥っていたのです。そして、そうした生ぬるい生活に慣れてしまい、それで満足していたのです。しかし、この「安んじる」生活は、ユダヤ人のみならず、わたしたちの生活にも密かに入り込んできているのではないのでしょうか。

西洋思想史の中で、実はこの問題を深く捉え、それを暴き出した人がいます。それは、パウル・ティリッヒという神学者です。ティリッヒは、ドイツに生まれ育った人ですが、後にヒトラーによってドイツを追われ、アメリカに亡命し、アメリカで大いに成功した神学者ですが、ティリッヒは、ヨーロッパの近現代の精神史を振り返ったとき、そこにこの「安んじる」生き方、「安住する」生き方が潜んでいるのを見抜いたのです。そして、そうした生き方を「ブルジョア精神」と名付けました。「ブルジョア」とは、資本家階級を意味するブルジョアジーに基づく言葉で、ブルジョアジーは封建社会を打倒し、資本主義経済

に基づく近代社会の担い手になった人たちですが、ティリッヒはそうしたブルジョアジーの中に、安んじて生きる安易な精神を見て取ったのです。そして、それを「ブルジョア精神」と名付けたのです。そして、それは、主としてブルジョアジーたちに見られるとしても、それを超えて広く近代社会に見られる安易な精神だと考えたのです。

この「ブルジョア精神」が、現代社会にも潜んでいるのではないのでしょうか。そして、わたしたちの生活にも入り込んでいるのではないのでしょうか。ある人は家柄を誇り、ある人は学歴を誇り、ある人は財産を誇り、ある人は権力を誇り、ある人は美貌を誇ります。しかし、そこには、その誇りに胡坐をかき、そこで満足し、たとえ自分に向けられた批判や叱責があるとしても意に介せず、却って人を蔑み、どこかでせせら笑うような安易な生き方があるのではないのでしょうか。特に、政治家たちを見ていると、そういう人たちが多くのように思われます。しかし、そうした、自分の誇りとするところに安んじて生きる生き方は、結局は自分自身を蝕む毒素となって体の中を巡って行くのです。そして、それは、終には、そうした誇りに反する恥ずべき生き方となっていくのです。そして、それは、キリスト者の場合でも同じではないのでしょうか。洗礼を受けたことが、免罪符にはならないのです。自分は罪を悔い改め、洗礼を受けたからと言って、それだけで自分を善人とすることはできないのです。もし、そう思うならば、それは密かに洗礼を誇り、そこに胡坐をかくことなのです。高をくくることなのです。自分は洗礼を受けているのだから、そうでない人たちよりは善人なんだとか、いい人なんだとか思ったら、その途端、その誇りとする洗礼は何の価値もないものへと転落してくのです。それは、教会の中でも同じです。自分は人よりも熱心に礼拝に出ている、多く奉仕している、多く献金を捧げている、等々と心に抱き、それに誇りを感じ始めるとしたら、それは誇りの上に胡坐をかき始めることでもあるのです。

だからこそ、パウロは、目に見える割礼ではなく「心の割礼」が大切だと言ったのです。見えるところではなく、見えないところが大切なのです。しっかりとキリストと結びついているかどうか大切なのです。そこが明確であれば、人に自慢できるところに胡坐をかいて、墓穴を掘るようなことはなくなるのです。パウロは、自分はキリストの死を身に帯びていると語りました。またキリストの焼き印を押されているとも語りました。そこには、おごり高ぶる思いや、いい加減な思いは微塵もありません。神学者のカール・バルトは、絶えずグリュエーネヴァルトの描いた十字架につけられたキリストの絵を見ながら神学したと言われています。十字架につけられたキリストを前にして、誰が自分を誇ることができるのでしょうか。誰がいい加減な思いになれるのでしょうか。むしろ、襟を正し、キリストのみ苦しみに、ただ首を垂れるだけではないのでしょうか。

その意味では、十字架のキリストを心に抱くことこそ、心の割礼であるとも言えるのではないのでしょうか。十字架のキリストを心に抱いている限り、わたしたちはキリストの道を踏み外すことはないのです。

「内面がユダヤ人である者こそユダヤ人であり、文字ではなく“霊”によって心に施された割礼こそ割礼なのです」。今朝は、今日の聖書に記されたユダヤ人を他山の石としながら、この御言葉を心に深く刻みたいと思います。